

## 《学会参加記》

## 第3回ガーナ国際西洋古典学会議（ICCG）に参加して

酒 嶋 恭 平

2024年9月18日から20日にかけてガーナの首都アクラにあるガーナ大学で行われた第3回ガーナ国際西洋古典学会議（The Third International Classics Conference at Ghana [略称：ICCG]）に参加し、報告を行った。

ICCGはガーナのガーナ大学古典・哲学部とケープ・コースト大学古典・哲学部が共同で運営するガーナ西洋古典学協会（The Classical Association of Ghana）が2・3年おきにガーナ大学で開催する学会である。ガーナ大学設立70年記念を節目として2018年に第1回が開催されたかなり新しい学会であり、新型コロナウイルス感染拡大の影響を受けつつも、2021年には第2回が開催された。ナイジェリアのイバダン大学などの近隣地域の大学や、アメリカ、イギリス、カナダなどアフリカ外の大学との提携も行っており、今回行われた第3回会議では、ケンブリッジ大学西洋古典学部が共同開催者として加わっている。なお、使用言語は英語である。

ところで、アフリカの西洋古典学と言えば南アフリカのそれを想起する方もおられよう。そこで、ガーナにおける西洋古典学の歴史について、簡単に触れておきたい<sup>1)</sup>。

ガーナはイギリスの植民地として19世紀初頭まで遡る西洋古典教育の伝統があり、それを引き継ぐ形で、国内唯一の公立大学であるガーナ大学（1948年創立）とケープ・コースト大学（1962年創立）には、それぞれ1948年と1963年に西洋古典学部が設置された。この二つの大学は、1960年代に始まる教育の「アフリカ化」や脱植民地化の荒波を乗り越え、哲学部との合併をも経験しつつ、西アフリカでも数少ない古典教育を行う公立大学としての地位を保っている。また、先述のガーナ西洋古典学協会は1952年に設立されたことが知られている<sup>2)</sup>。

ガーナを含む西アフリカ諸国では、独立に前後する1960年代より、旧宗主国の政治的・文化的影響から脱却を目指し、自国の教育をアフリカの社会・文化的状況に適合させ、アフリカの性格を反映した教育を自国民に提供する必要性が説かれていった。この教育のアフリカ化の背景となったのは、アフリカ人エリート層が白人世界との対峙の中で作り出した、アフリカの個性に基づき超国家的なアフリカの団結を目指すというパン・アフリカニズムである。1960年代にこの理念を推進したのは、1960年に共和制に移行したガーナの初代大統領にして哲学者クワメ・ンクルマであった。彼は、政治・社会・経済のあらゆる局面でアフリ

カ諸国の独立を目指し、特に西洋古典学との関連では、祖国ガーナにて、西洋中心的な教育カリキュラムを再構築し、知識体系のアフリカ化を目指した。この中でガーナにおける西洋古典学は、アフリカとは無関係で社会的有用性の無い学問として認識されることとなる。もともと西洋古典学は、アフリカのみならず旧植民地諸国において、ヨーロッパ文明の象徴的存在にして植民地主義、エリート主義、人種差別主義、白人至上主義を意味しその浸透に奉仕する西洋的抑圧の権化として捉えられていたから、ガーナにおいても猛烈な社会的圧力に曝されることとなった<sup>3)</sup>。

この教育のアフリカ化の波を生き抜くため、ガーナの西洋古典学は、アフリカ、特にサハラ以南のアフリカを焦点化する古代ギリシア・ローマ史叙述を模索し始めた。具体的には、西洋古代の知識の社会的有用性を提示すべく、サハラ以南のアフリカと古代世界との比較史やアフリカにおける受容史を研究・教育に取り入れていったのである。その後も、1987年以降、ガーナにおける中等教育における古代ギリシア語、ラテン語教育が漸次的廃止や、人文学全般に対する強力な社会的圧力に曝されつつも、この「アフリカとの関連性」という視点は今も基本路線として維持され、むしろ昨今の受容史研究ブームの中で更なる広がりを探している。

ICCGのテーマ設定は、このようなガーナ、そして西アフリカにおける西洋古典学の伝統をよく示している。2018年に開催された第一回のメイン・テーマは「Classics and Global Humanities」、2021年に開催された第二回は「Global Classics and Africa: Past, Present, and Future」と、西洋古典学の教育・研究をグローバルな現象として捉えつつ、アフリカにおける西洋古典学の在り方をその中で捉え直そうとするものであった。近年の受容史研究では、西洋古典学が内在してきた西洋中心的な視点を解体することを目指して、西洋文明の遺産として位置づけられる西洋古代の知識が、近現代西洋文明やその他の国家・社会の自己定立の中でいかに利用されてきたかを検討する研究が進められている<sup>4)</sup>。ICCGは、既存の西アフリカにおける西洋古典学研究の伝統を、こうした潮流に位置づけることを目標としている<sup>5)</sup>。

第3回 ICCGのメイン・テーマは「Classics Beyond Borders」というもので、ケンブリッジ大学西洋古典学部のFrisbee Sheffieldがリーダーとなって進めている同名のプロジェクトが由来となっている。これはイギリス統治下にあった国々の大学との協力関係を通じて西洋古典学の脱植民地化を狙うもので、ガーナ、そしてICCGはまたとない共同研究相手であった。それゆえ、これまでの西洋古典学受容の歴史を検討するのみならず、世界中の研究者との広範なネットワークを構築することも今次のICCGの狙いとなった。(ガラティア人の受容を検討した私の報告は必ずしもメイン・テーマに沿うものではなかったが、質疑応答にて、場所ならではの優れたフィードバックを頂けたことは付言しておく。)

さて、今回のICCGは、報告者の総数は41名、キーノート・スピーカーやスペシャル・セッションを合わせると、46の報告があった。報告者の多くはアフリカ各地の大学の学生・研究者だったが、ヨーロッパや北米からも多数の研究者が参加しており、またアジアからは

私を含め2名の研究者が報告を行った。多くの参加者にとって、これまで参加した中で最も国際的な研究集会となったろうことは想像に難くない。

初日は招待講演と特別セッション、2日目は個別報告が行われ、3日目はケープ・コースト城などへのエクスカーションが行われた。

初日の報告で興味深かったのは、ガーナ大の Kofi Ackah によるもので、アフリカ社会の汚職問題をプラトン哲学によって解決しようという、意欲的な議論であった。また、ロンドン大キングス・カレッジの Daniel Orrells による報告は、19世紀から20世紀にかけてドイツ知識人がオイディプスをあらゆる人類に適応可能な存在として抽象化していく過程を、古代ギリシアの人間像を普遍化させた過程だと喝破するものであった。現代人の思考や世界認識を形作ってきた近代の学識に西洋古典学が与えた強力な影響を示すだけでなく、それをいかに脱西洋化させ、新たな知の体系を構築していくべきか考える上で、示唆に富んでいた。

2日目の個別報告は合計12のパネルにまとめられ、ひとパネル2-3名が報告し、3つのパネルが同時進行した。近代・現代における西洋古典の受容から、『イリアス』の描写まで幅広いテーマが取り上げられたが、報告の多くは古代から現代までのアフリカを扱ったものが多かった。アフリカの研究者たちの幅広い関心を知ることができたし、またアフリカを焦点化した西洋古典学研究の可能性を改めて理解することができた。個人的には、ペンシルベニア州立大の Mathias Hanses によるカエサル『アフリカ戦記』内のヌビア人描写に関する報告が参考になるものであったし、また、ウィニペグ大（カナダ）の Flavia Vasconcellos Amaral による、ブラジル・ポルトガル語による西洋古典文献の再翻訳に関する研究報告は、ブラジルにおける言語を通じたポルトガルからの脱植民地化の試みをよく示していて、大変勉強になった。その一方で、メモリアル大（カナダ、ニュー・ファンドランド）の Luke Roman による西洋古典学のネットワーク形成に関する自身の経験についての報告では、アフリカの諸大学が抱える資金難とアフリカ人学生のビザ問題が、ネットワークキングにおいて重大な障壁であったと示されており、印象的であった。

総じて、自分の研究進展の上でも、またアフリカという比較的日本の西洋古典学者には未知の土地を経験したという意味でも、非常に良い経験であった。この学会は無論、受容史ではなく古代の研究を優先する人にとってはやや物足りない学会かもしれないが、しかし、幅広い国際協力のもとに西洋古典学を盛り上げようという機運を如実に感じることもできる場であったことは疑いえない。様々な意味で、積極的に関与してよいのではと感じている。

次の開催予定は2026年とのこと。次回は哲学がメイン・テーマとなるらしい。ぜひ日本からも報告者を、と言いたいところだが、ガーナは日本から遠く、治安や衛生の面で西洋古典学者になじみの欧米とは異なる点があるので、お勧めできないというのが本音である（この辺りの事情は外務省のホームページなどを参照されたい）。ガーナに入国するにあたり必須であった黄熱ワクチンと、推奨された狂犬病・三種混合・A型肝炎等のワクチンを合計8回摂取することになった。1本がだいたい1万5千円程度かかる。また、ガーナ入国のため

のビザ申請も安くはなく、渡航費や滞在費を含め全てまとめるとなかなか痛い出費であった。魅力的な場だが、報告に至るまでの様々な負担は大きい。

## 注

- 1) 以下の文章は、宮本・松田 1997; 砂野 2023; 谷口 2023 に加え、ICCG の創設メンバーにして第 3 回も主宰を務めた Okyere Asante の論文を参考に行っている (Okyere Asante 2022)。
- 2) なお、この協会は 1972 年から 2018 年まで休止状態にあったらしい (Okyere Asante 2022: 23, n. 34)。
- 3) 例えばフランツ・ファノン『地に呪われた者』(原著 1961 年)、ヤクワメ・ンクルマの *Consciencism* (1965 年) など。
- 4) 欧米やギリシアにおける古典受容の歴史については、改めて指摘するまでもなく、無数の先行研究がある。簡単に列挙してみると、Leonard 2005; Hamilakis 2007; Chaniotis, Kuhn and Kuhn 2009; Orrells 2011; Tziouvas 2014. わが国でも曾田長人の一連の研究がある(特に曾田 2005; 曾田 2021)。近年ではスペインやアイルランドなど、わが国では比較的馴染みの薄い国家・地域に関する研究も英語で出版されつつある。例えば Torlone 2014; Torrance and O'Rourke 2020; Balaskas forthcoming. また、Kovacs and Marshall 2011; Kovacs and Marshall 2015; Hajdu 2024. また、ヨーロッパと他の地域との関係、あるいは他の地域における西洋古典学受容の研究も最近増加しており、例えば Hardwick and Gillespie 2007; Hilton and Gosling 2007; Stephens and Vasunia 2010; Hardwick and Harrison 2013 のように西欧とその他の地域における西洋古典の受容を広く検討した書物や、アラブ世界 (Pormann 2009; Pormann 2015)、アフリカ (Goff and Simpson 2007; Lambert 2010; Orrells, Bhabha and Roynon 2011; McConnell 2013; Parker 2017; Okyere Asante, van Schoor and Ackah 2022; Agbamu 2024; McKechnie, Nyamilandu and Kambalu 2024)、アジア (Vasunia 2013; Renger and Fan 2018; Yaari 2018; Murray 2020)、中南米 (Greenwood 2010) といった地域に関する研究が出版されている。上記の書籍の多くは、Oxford University Press のシリーズ *Classical Presences* や、Bloomsbury Publishing のシリーズ *Classical Reception* から出版されている。また、2009 年に創刊された西洋古典の受容史を扱う雑誌 *Classical Receptions Journal* から多数の研究論文が出版されている。日本では南川 2006 や野津 2015、渡邊 2017 などの論文があるが、最近では、Cardi Luciana による「日本における西洋古典受容に関する国際共同研究——近世からグローバル化の時代へ——」、林智良による「世界的文脈から見た日本のローマ法研究受容と発展とに関する総合的比較研究」などの大型プロジェクトが進行中である。
- 5) 第 1 回・第 2 回の CFP はそれぞれ次のウェブサイトでご覧可能である。第 1 回: <https://classicswestafrica.wordpress.com/call-for-papers/> [2024 年 11 月 29 日閲覧確認]、第 2 回: <https://www.eosafricana.org/announcements/cfp-2nd-international-classics-conference-in-ghana> [2024 年 11 月 29 日閲覧確認]。

## 引用文献一覧

- Agbamu, S. 2024. *Restorations of Empire in Africa: Ancient Rome and Modern Italy's African Colonies*. Oxford.
- Balaskas, V. forthcoming. *Revivals of Classical Drama in Greece and Spain (1860s–1970s): Theatre in the Realm of Ideology*. Oxford.
- Chaniotis, A., A. B. Kuhn and C. Kuhn. (eds.). 2009. *Applied Classics: Comparisons, Constructs, Controversies*. Stuttgart.
- Goff, B., and M. Simpson. (eds.). 2007. *Crossroads in the Black Aegean: Oedipus, Antigone, and Dramas of the African Diaspora*. Oxford.
- Greenwood, E. 2010. *Afro-Greeks: Dialogues between Anglophone Caribbean Literature and Classics in the Twentieth Century*. Oxford.

- Hajdu, P. 2024. *Modern Hungarian Culture and the Classics*. London.
- Hamilakis, Y. 2007. *The Nation and its Ruins: Antiquity, Archaeology, and National Imagination in Greece*. Oxford.
- Hardwick, L., and C. Gillespie. (eds.). 2007. *Classics in Post-Colonial World*. Oxford.
- Hardwick, L., and S. Harrison. (eds.). 2013. *Classics in the Modern World: A Democratic Turn?* Oxford.
- Hilton, J., and A. Gosling. (eds.). 2007. *Alma Parens Originalis? The Receptions of Classical Literature and Thought in Africa, Europe, the United States, and Cuba*. Oxford and New York.
- Kovacs, G., and C. W. Marshall. (eds.). 2011. *Classics and Comics*. Oxford.
- Kovacs, G., and C. W. Marshall. (eds.). 2015. *Son of Classics and Comics*. Oxford.
- Lambert, M. 2010. *The Classics and South African Identities: Classical Diaspora*. London and New York.
- Leonard, M. 2005. *Athens in Paris: Ancient Greece and the Political in Post-War French Thought*. Oxford.
- McConnell, J. 2013. *Black Odysseys: The Homeric Odyssey in the African Diaspora since 1939*. Oxford.
- McKechnie, P., S. Nyamilandu and S. Kambalu. (eds.). 2024. *A Monument More Lasting than Bronze: Classics in the University of Malawi, 1982–2019*. Washington, DC.
- Murray, C. 2020. *China from the Ruins of Athens and Rome: Classics, Sinology, and Romanticism, 1793–1938*. Oxford.
- Okyere Asante, M. K. 2022. 'Classics and the politics of Africanization in Ghana'. *BICS* 65: 18-31.
- Okyere Asante, M. K., D. van Schoor and K. Ackah. (eds.). 2022. 'Decolonizing Classics in Africa: history, strategies, challenges, and prospects'. *BICS* 65: 1-89.
- Orrells, D. 2011. *Classical Culture and Modern Masculinity*. Oxford.
- Orrells, D., G. K. Bhambra and T. Roynon. (eds.). 2011. *African Athena: New Agendas*. Oxford.
- Parker, G. (ed.). 2017. *South Africa, Greece, Rome: Classical Confrontations*. Cambridge.
- Pormann, P. E. 2009. 'Classics and Islam: from Homer to al-Qā'ida'. *International Journal of the Classical Tradition* 16: 197-233.
- Pormann, P. E. 2015. 'Greek thought, modern Arabic culture: Classical receptions since the Nahḍa'. *Intellectual History of the Islamicate World* 3: 291-315.
- Renger, A.-B., and X. Fan. (eds.). 2018. *Receptions of Greek and Roman Antiquity in East Asia*. Leiden.
- Stephens, S. A., and P. Vasunia. (eds.). 2010. *Classics and National Cultures*. Oxford.
- Torlone, Z. M. 2014. *Vergil in Russia: National Identity and Classical Reception*. Oxford.
- Torrance, I., and D. O'Rourke. (eds.). 2020. *Classics and Irish Politics, 1916–2016*. Oxford.
- Tziovas, D. (ed.). 2014. *Re-imagining the Past: Antiquity and Modern Greek Culture*. Oxford University Press.
- Vasunia, P. 2013. *The Classics and Colonial India*. Oxford.
- Yaari, N. 2018. *Between Jerusalem and Athens: Israeli Theatre and the Classical Tradition*. Oxford.
- 砂野幸稔. 2023. 「アフリカ諸国の「独立」とアフリカエリート」荒川正晴ほか編『岩波講座世界歴史 22 冷戦と脱植民地化 I ——20 世紀後半——』岩波書店, 199-218 頁.
- 曾田長人. 2005. 『人文主義と国民形成——19 世紀ドイツの古典教養——』知泉書店.
- 曾田長人. 2021. 『スパルタを夢見た第三帝国——二〇世紀ドイツの人文主義——』講談社.
- 谷口利律. 2023. 「独立期西アフリカにおける教育援助——国際援助、二国間援助と教育の「アフリカ化」に着目して——」『早稲田教育評論』37, 39-56 頁.
- 野津寛. 2015. 「日本における西洋古典語教育の始まり——田中秀央を中心に——」成城大学文芸学部ヨーロッパ文化学科編『西洋古典のすゝめ』成城大学文芸学部, 131-45 頁.
- 南川高志. 2006. 「古代ギリシア・ローマ研究の発展と東洋人学者の立場」紀平英作, 吉本道雅編『京都と北京——日中を結ぶ知の架橋——』角川書店, 228-49 頁.
- 宮本正興, 松田素二編. 1997. 『新書アフリカ史』講談社.
- 渡邊顕彦. 2017. 「日本と西洋古典についての覚書 (1) ——「受容」という視点——」『東京大学西洋古典学研究室紀要』10, 73-105 頁.